

平成 26 年度 教員活動自己点検・評価報告書 記載内容のまとめ

※各項目ともに「C 積極的でなかった」の自己評価に対する理由を記載

※同様な内容は同一記載として一括

1. 教育活動

(1) 授業活動

C の自己評価無し。

(2) 実習指導活動

※実習を持たない教員は除く。

- ・ 適当な症例が無い。学生の専攻テーマが、私の専攻と異なる為、講義のみで終了。
- ・ 実習後に行っている症例報告会の参加と学生に対する指導にとどまった。

(3) 教育改善活動

C の自己評価無し。

(4) 研究指導活動

- ・ 直接の指導下にある大学院生が、具体的に研究方法をアドバイスしても成果を提出してこない。

2. 研究活動

(1-1) 学術論文等による研究発表活動を活発に行ったか。

- ・ 学術論文による報告を行っていないため。(同様記載 6 名)
- ・ 平成 26 年度の研究成果の発表および公表は 1 本であった。
- ・ 総説 1 編の執筆に留まった。
- ・ 今年は、過去の自分の研究計画・手法、成果の検証を行った。また各種診療ガイドラインの整理と整備に研究時間を費やした。そのガイドラインから学ぶことも大変多く、エビデンスレベルとして質の高い研究方法を学んだ。その観点からも、自身の研究が、エビデンスレベルの低い研究手法を使っており、2 群間比較に留まっていることが確認できた。しかし、研究内容は循環器領域と腰痛領域に絞られており、専門領域としての今後の方向性を確認できた。
- ・ 論文 1 編 (共著) のみ。
- ・ 個人的な活動として地域リハビリテーション実践にかかわっている。具体的には、①障がい者の就労支援事業での就労プログラム担当、②障害者の地域生活支援事業でのグループ活動指導、③障がい者家族への相談プログラムなどである。いずれも実践中心で、学術的な論文作成には至っていない。

- ・今年度は（一社）大阪府作業療法士会第 29 回大阪府作業療法学会学会長を務めたため、かなりの時間をその責務に費やしたため。
- ・今年度は共著者としての投稿や企業情報誌への寄稿はあったが、自身が査読審査のある学術論文へエントリーすることには至らなかった。そのことが、評価を下げた大きな要因である。
- ・H26 年度は、新たに主任に着任した年であり、専攻科の運営活動に専念した。また、学生募集状況を好転させるべく、広報活動に力を注いだ。
- ・担任としての学生指導、講義準備、国試対策準備、委員会活動などにより時間的な余裕が無い。
- ・本年度は、時間的・労力的に教育活動に重きを置いたため、研究発表は行うことができませんでした。（同様記載 2 名）
- ・昨年度は第一著者としての投稿は皆無であった。

（1－2）学術論文等により、質の高い研究発表活動がなされたか。

- ・研究発表活動が行えていないため。（同様記載 5 名）
- ・質の高い研究発表については未だ不十分である。（同様記載 2 名）
- ・著書であるために質の高い研究発表とはいえない。
- ・成書編集、分担執筆や依頼原稿作成は行えたものの、学術論文は個人としてまったく発表できていない。
- ・平成 26 年度の投稿論文は前述した共同研究論文のみである。
- ・科研の研究は、平成 26 年度から 28 年度にかけての 3 年間の研究であり、まだ研究成果は得られていないが、質の高い研究発表となるよう努力する。
- ・京大病院での臨床が 20 年になるため、書かなければならない内容はたまる一方である。今年度は新教授の着任が予定されているが、それまでに少しでも研究活動したい。京大耳鼻科に就労した ST 専攻の卒業生たちの学会発表は、論文の形にまでなっておらず、それらも指導出来たらと考えている。
- ・実践報告レベルにとどまった。
- ・個人的な活動として地域リハビリテーション実践にかかわっている。具体的には、①障がい者の就労支援事業での就労プログラム担当、②障害者の地域生活支援事業でのグループ活動指導、③障がい者家族への相談プログラムなどである。いずれも実践中心で、学術的な論文作成には至っていない。
- ・今年度は（一社）大阪府作業療法士会第 29 回大阪府作業療法学会学会長を務めたため、かなりの時間をその責務に費やしたため。
- ・依頼論文のみであり、原著論文への投稿は行わなかった。
- ・H26 年度は、新たに主任に着任した年であり、専攻科の運営活動に専念した。また、学生募集状況を好転させるべく、広報活動に力を注いだ。

- ・担任としての学生指導、講義準備、国試対策準備、委員会活動などにより時間的な余裕が無い。
- ・学生に対する学習支援に力を注ぐため研究活動はしていない。
- ・学生対応や専攻科運営と臨床活動のみで、時間的・体力的に限界だった。

(2) 学会等における研究発表活動

- ・今年度は学会発表を行っていないため。(同様記載 6名)
- ・今年度は、過去の自分の研究計画・手法、成果の検証を行った。また各種診療ガイドラインの整理と整備に研究時間を費やした。そのガイドラインから学ぶことも大変多く、エビデンスレベルとして質の高い研究方法を学ぶことができた。そして、自身のプレゼンテーション能力や研究計画・研究手法を見直すという姿勢をとり、学会発表は行わなかったが、学会活動には参加し、多くの研究手法・計画・プレゼンテーションを学ぶことができた。
- ・今年度は学術論文での活動に終始した。ただ、論文作成段階で、我々のグループで行っている研究手法および結果の解釈などの妥当性について他者と議論したい点などが出てきた。来年度以降は、より研究を先へ進めるため、学会の場での報告も積極的に行っていきたい。
- ・個人的な活動として地域リハビリテーション実践にかかわっている。具体的には、①障がい者の就労支援事業での就労プログラム担当、②障害者の地域生活支援事業でのグループ活動指導、③障がい者家族への相談プログラムなどである。
いずれも実践中心で、学術的な論文作成には至っていない。
- ・H26年度は、新たに主任に着任した年であり、専攻科の運営活動に専念した。また、学生募集状況を好転させるべく、広報活動に力を注いだ。
- ・学生に対する学習支援に力を注ぐため研究活動はしていない。
- ・学生対応や専攻科運営と臨床活動のみで、時間的・体力的に限界だった。

(3) 競争的資金の申請・獲得状況

- ・競争的資金獲得のための申請は行わなかった。(同様記載 7名)
- ・1件申請した。
- ・科学研究費若手 B が継続課題であったため、それに集中するために今年度の新規申請は実施しなかった。
- ・申請していない。経頭蓋直流電気刺激を用いた研究は既に実施中であり、新たな研究計画案を作成できていない段階である。今回の研究の限界を整理し、次の研究計画案に繋げていきたい。
- ・科研費への応募を見送った。再チャレンジ組の指導のウェイトが高かったことが大きい。今年度はチャレンジしてみたい。他は共同研究として1件あるのみ。

- ・共同研究者として地方銀行の研究資金を獲得したのみである。
- ・個人的な活動として地域リハビリテーション実践にかかわっている。具体的には、①障がい者の就労支援事業での就労プログラム担当、②障害者の地域生活支援事業でのグループ活動指導、③障がい者家族への相談プログラムなどである。いずれも実践中心で、学術的な論文作成には至っていない。
- ・これまで継続してきた研究による学会発表は行えたが、2-（1）の理由により新しく長期の研究計画を立てる余裕がなく競争的資金の申請を行うことができなかった。
- ・「一般就労における知的障がい者の早期離職を抑制するシステムの構築に関する研究」
2014年～2016年、科学研究費補助金 基盤研究(C)、課題番号 26380811 研究代表者（関西福祉科学大学 福井信佳准教授）の共同研究者として参加しておりアンケート調査の実施、インタビュー調査の準備等に追われている状況である。また、体調を崩し10月より入院していたこともC判定の理由としてあげられる。
- ・H26年度は、新たに主任に着任した年であり、専攻科の運営活動に専念した。また、学生募集状況を好転させるべく、広報活動に力を注いだ。
- ・担任としての学生指導、講義準備、国試対策準備、委員会活動などにより時間的な余裕が無い。
- ・学生に対する学習支援に力を注ぐため研究活動はしていない。
- ・学生対応や専攻科運営と臨床活動のみで、時間的・体力的に限界だった。

3. 社会貢献活動

（1）府等の委員会への参画活動

- ・府等の委員会への参画活動は行わなかった。（同様記載 12名）
- ・国、府、市町村等の委員会には参加していない。厚労省共催、医療研修推進財団主管：理学療法士・作業療法士・言語聴覚士養成施設等教員講習会 運営委員・講師のみ継続参画している。
- ・興味なく、積極的に行う意思がない。
- ・直接提言する機会は無かったが、関連学会での高齢者の諸課題に応じた研究発表を行った。
- ・パブリックコメントにおいては提言ならびに参加したが、委員という立場では参加していない。また理学療法士という枠組みを少し離れ、姫路市都市計画への提言を行った。リハビリテーションの立場から、住みよい街とは何かを考える機会を得た。
- ・H26年度は、新たに主任に着任した年であり、専攻科の運営活動に専念した。また、学生募集状況を好転させるべく、広報活動に力を注いだ。
- ・行政とはつながりがなく、アドボカシー活動の機会がなかった。

(2) 地域に密着した学習支援活動

- ・地域に密着した学習支援活動は特に行わなかった。(同様記載 8 名)
- ・活動の機会がなかった。(同様記載 2 名)
- ・社会人向けの公開講座、高大連携講座はまだ行ったことがない。ただし NPO 法人活動を通じた地域支援活動は継続している。
- ・興味なく、積極的に行う意思がない。
- ・特に依頼はなく、実施していない。依頼があれば、引き受けたい。
- ・高校での進学ガイダンス以外に、社会人向けの公開講座、高大連携講座を実施していない。
- ・H26 年度は、新たに主任に着任した年であり、専攻科の運営活動に専念した。また、学生募集状況を好転させるべく、広報活動に力を注いだ。

(3) 職能団体参画等の活動

- ・職能団体への参加・協力は特に行わなかった。(同様記載 5 名)
- ・平成 24 年度末、長年努めた大阪府理学療法士会理事を退任した。以後、職能活動への積極的参加はない。
- ・協会活動に不信感を持っているため、積極的に活動しようと思わない。
- ・活動の意義と重要性は認識しているものの、なかなか関わる機会が無い(時間を振り向けられない)。
- ・自分なりに作業療法の普及に関連した活動を積極的に行ったつもりであるが、職能団体を通じて行ったものはほとんどなかった。

4. 大学運営活動

(1) 各種委員会活動

- ・国家試験対策については、落穂ひろいの活動(模擬試験の実施の補助、再チャレンジの勉強会など、対策講義・個別指導)および現役学生の心理的支持活動を行った。男女共同参画委員会は委員長を学長から拝命したものの、アンケート調査の実施の先が見えないなど、アンケートは委員の先生方や多くの先生方のご協力を頂き作成しながら実施しておらず、申し訳なかったと考えている。